

4. 退所後の困難

退所後の生活での困難は、第一に、ハンセン病を隠すことであった。第二に、療養所にいたという経歴を隠すことであった。また、両親の居場所も隠した。したがって、履歴書が一番困り、履歴書を書き換え、また、仕事を探す場合も履歴書の不要な職を選んだ。地域的にも病気のことが知られやすい地方では就職は無理であった。また、受診のために仕事を休む理由を考えるのも苦労した。

このような状況では、多くの場合、仕事は、自営業、農業、土木事業関係や重労働、アルバイトなど不安定就業であった。

さらに、履歴書については、「嘘」も書かざるを得ない状況に追いつめられていた。そのため、受けられる権利例えば軍人恩給の申請を断念、受給権を放棄した例も見られる。

こうした事例は、50年生まれで、70年退所という人にも見られるのである。

また、社会生活を全く知らなかったので健康保険や年金の手続きにとまどったことも語られている。

こうした生活において、身体、精神的な困難から再発し妻子と別れ療養所に戻らざるを得なかった例もある。

療養所を退所しても、医療面では特に療養所に通わざるを得ず、その事さえ隠さざるを得なかった。また、再発の不安にさいなまれる日々でもあったといえよう。その意味でも「二度と戻りたくない」療養所との関係も断てなかったのである。

まず、全体的な事例を挙げておこう。

「自営業のため履歴書問題はなかった。健康診断を求められたことはあった。『癩病』にかかったことがわかったら、人がついて来ないので『細々』と続けてきた。契約に至らず、あるいは契約破棄、工作中かかったことのある眼科医に「帰れ」と言われたり、様々な苦労があった。公職にはつけないので遠慮してきた。」(1931年生 男性 1964年入所)

「大阪に出て、その足でトランクを持ちあてもなく働けそうな所を探して歩いた。ふと住み込みで乳酸飲料配達人募集という貼り紙がある家を見つけた。『よーし』と思い、大将(主人)に頼んだら『保証人は?』と聞かれ『広島に兄貴がおりますわ』と答えたが『広島ではどうにもならん、月末には集金があるし』と断られた。しかしその場で土下座して頼んだら『とりあえず配達だけ』ということで雇ってもらった。その後働きが認められ大将が保証人になってくれた。それがなければ(その後の人生は)どうしようもなかった。」(1932年生 男性 1952年入所)

(1) 病気を隠す

「ハンセンをかくすのに必死であった。」(1942年生 男性)

「ともかく人に知られないように細心の注意をはらった。曲がっている指をテープで1

本1本巻いて伸ばして、仕事に従事している。右手でやるべきところを左手でしたり、食事の際はできるだけ人にわからないように右手を隠したりと気を使っている。」(1934年生 男性)

「病気のことは口が裂けても言えない。無菌なのだから移すこともないし、危険ではない(履歴書に病気のことを書く必要ない)」(1944年生 女性)

「転職は何とかウソをついてきたが、入社後お金をかぞえる、という実技があって(金融関係だったので)指先のマヒがあってうまく、数えられなくて他のことはうまくやれるのに、それだけはどうしても、うまくやれなくて、上司からも同僚からも「何で君くらいの人が…」と言われてよけいに、あせってしまって、大変だった。これを通過しないと、正社員にはなれないことがわかっていたので、最後には何とかうかってほっとした。」(1938年生 男性 1952年退所)

「手を隠す(理髪点でも)。集金でお金を受け取るとき(特に小銭)困った、つらかった。」(1933年生 男性 1981年退所)

「ハンセン病であったことを隠さざるを得ず、他人に雇ってもらったり、他人と一緒にする仕事は考えられなかったので慣れないながらも自分で仕事をおこしていかなければならなかった。」(1918年生 男性)

(2) 履歴書

「1度だけ履歴書を書くのに困り採用試験を断念した(市役所の公用車運転手)。タクシードライバーのバイトは履歴書の提出なかったので気楽にできた。」(1939年生 男性)

「名前も変えていますから。仕事場に行くと、一番困ったのが、履歴書だった。履歴書が書けなかったですね。出身校の中学卒で出した。中学1年までいるからね。中退というわけにいかないしね。中学を中退したというわけに行かないから、出身地の中学はちゃんと卒業したという履歴書を書いて、あとは、通信学校も、ラジオ通信とかもやっていたから、通信学校を中退したとかそういう感じで。職場は、田舎で農業をしていたと。そこに来て、どういう仕事をしていたと、ここに来て自分がやった仕事を。全くウソです。」(1937年生 男性)

「履歴を書く必要のない職を選んだ。ちゃんとした仕事が出来ない。知られたら大変だからだ。」(1931年生 男性)

「予防協会等、あまり仕事を捜してくれないし、頼むのも避けていた。ここからの紹介となると病気だったことがわかるので。例えば刑務所から出てその紹介で仕事を捜すのは前科が言われるようなものだから。」(1953年生 男性)

「履歴書に空白ができてしまうので、できるだけ、気づかれないようにごまかした。昔のことは書かないようにした。今の仕事は、知人が紹介してくれたのだが、その知人には、「精神科的療養」をしていたと話した（精神病というほうが、まだ良かった）。幸い、職場に恵まれ、過去の経験や、障害（足指切断）のことも、詮索されず、就職後も、一ヶ月程の療養休暇をとることができた。」（1947年生 男性）

「空白の履歴書（期間）を埋めるのに苦労した。自治会の書記をしていたので、会計をやっていた。雑貨屋をしていたとかごまかすのが大変だった。雑貨屋の手伝い、農協の事務などウソで固めた。」（1926年生 男性）

「履歴書には、新良田卒業は書かず、前の高校中退で届けた。デタラメの経歴を書いて出すので話が合わなくなり、そんなことへの準備もなかったので、刑務所帰りの者かと思われたようだ。そんな状況で最初の面接は失敗。2番目は勤めたものの知覚マヒあり、手から出血しても気付かず、体がもたず、すぐ退職。3番目で見つかった（63才まで勤めた）」（1937年生 男性）

「気に入った仕事があっても保証人の問題や学歴の問題（中卒）で就けなかった。又両親のことをきかれることもあって、『与那国にいる - 』とウソをついていた。（1943年生 女性）

「適当に経歴を作って書いた。療養所内の中学ではなく長崎の中学を卒業したことにしてある。その後は家事手伝いをしていたことにした。」（1950年生 女性 1962年入所 1970年退所）

（3）社会生活を知らず

「社会の事、何も知らない。遊びに行っても馬鹿にされる。人のやる事を見て覚えた。普通の人のように世間が分かるのに15年はかかった。年輩の人からいろんな事聞かれる。何もいえなくなる。家庭の事も聞かれるが、言えない。結局職場にいられなくなる。変人扱いされる。職場も転々と変った。実に37回も転職している。そこそこの会社には入れない。空白もあるし、結局、重労働しかなかった。」（1950年生 男性）

「外の生活、社会生活全く知らなかったので、健康保険や年金のことなどの手続きで困った。初めてなのでとまどった。ハンセン病のことは一切話さなかった。知られないようにした。」（1937年生 男性）

「最初は『履歴書って何だ』ぐらい何も知らなかった。世話してくれた人に書式を教えてもらったが『小学校を出て - 』と書き方を知ったとき、顔色が変わったと思う。世話してくれた人に言われたとおり書いて。嘘をつくのはつらいわな。」（35年生、男性）

「退所して何も知識がなく肉体労働しかできない。一生けんめい働き過ぎ、3年で体調をこわし、また新生園へ。半年して、良くなり何か軽い仕事をとと思った。結核になる。2年間結核病棟へ。」(1930年生 男性 1958年退所)

(4) 嫌がらせ

「イヤがらせがあった。夜中の1時、2時にも、アンマ、マッサージしてくれると思ってチャイムを鳴らす人がいたり、おもしろがって、1Wに何回かならされて、かなわなかった。10年以上もあって、困った。ハンセンに関係することではなく、夜中のマッサージを断ったことでされたと考える。」(1932年生 男性)

(5) 再発の不安の中で

「『ここ出してくれ』と言ったら、それはまだ控えたほうがいい』と言われた。S41ころにマイナスが続くようになった。『毎月来て検査するようにすれば出てもいい』と言われた。籍は置いておいたほうがいい。いつまた再発するかどうかが不安。一旦出るとその後世話になったときに何を言われるかわからない。外で仕事を始めたとき、人の世話になった。「あまり無理はしなさんな」と気にしてくれた。いろいろ周囲が世話してくれた。」(1930年生 男性)

「島に戻り家族を養うため働こうとしたが、突然いなくなったことから、ハンセン病であることは皆に知れわたっていた。なじみの料理屋ではしを折られ、コップをゴミ箱に捨てられるのを見て、気づいた。家族からも地域からも歓迎されない死んだも同然の生きた亡霊なのだと感じた。ハンセン病を隠すため園で暮らすか、見知らぬ大都会でひっそり生きるしかないと思った。病気を隠し、通院も服薬もせずに復職した新しい新聞社の勤務で疲労が重なり再発し、顔の斑紋があらわれたため、さらに広がらない内に島を出なければ、と、妻子をおいて全生園に戻った。」(1944年生 男性)

(6) 告白 - カミングアウト

ハンセン病元患者であることを言っていた人もいるが、70年代以降の入所者である。

「自分が元ハンセン病患者であることをはっきり言っている。最初に言っておかないと後でトラブルになる。」(1934年生 男性 1971年入所)

「自分からハンセン病である事を言う事はないが、特に隠す状況でもなかった。」(1939年生 男性 1974年入所)